

令和5年度神戸グローバルチャレンジプログラム 理学 Nanyang コースに参加して

：「自分の手で変える」

農学部生命機能科学科応用生命化学コース2年生

山口明理

「思ってたのと違うかった。」これは私が留学全体を通して抱いた感想です。しかし、これから留学の失敗談を並べていくつもりはなくて、思っていた以上に楽しくて、予想していたよりも多くの体験ができ、将来長期留学をしたいという気持ちがさらに強くなった経験でした。初めは一人での海外滞在に期待と不安をつのらせながら渡航しましたが、帰国するころには、大学もシンガポールで出会った人々のことも好きになっていて、夜寝ても次の日になったらまた現地の友達に会えるような不思議な気持ちになるくらい、シンガポールでの生活に馴染むことができたと思います。はっきりと言うと3週間で英語力が爆伸びしたかという、そこまで大きな変化はなく、少し話しやすくなったかなと感じるくらいです。それですが、3週間で受けた授業、学生との交流、シンガポールでできた友達との観光から得たものは大きく、今の自分、これからの自分に必要な経験であったと感じています。その断片を少しでもお伝えしていくために実際に体験したことをもとに書いていきたいと思っています。

まず、私がプログラムへの参加を決めた動機は、将来考えている大学院留学のために、研究はできなくても授業や大学の様子を知ることができると感じたことです。このプログラムは、8月に1学期が始まるシンガポールにある南洋理工大学で、初めの3週間分の授業を受けることができることと、GCPの中でも学生企画型となっており、ホテルや航空券を取り時間割を作ることから、現地での生活をどのようにするかスケジュールを立てることまで自分ですべて行わなければならないことが特徴であると思います。つまり、現地の学生とほとんど同じような生活を3週間経験することができるため、実際の大学生活の様子を知りたい私にはうってつけのプログラムでした。しかし、なぜか今年のプログラム参加者は私一人だけで、二回目の海外滞在(一回目はちょっとした旅行)なのに、教室までたどり着けるか、英語が通じるのか、果たして日本まで帰れるのかあらゆることが不安に感じましたが、逆にその状況が面白いとも感じて、こんなレアな体験はなかなかできない、どんな状況でも面白がって挑戦してみようと考えて3週間過ごすように心がけました。そのおかげとシンガポールの友達の助けがあり、充実した日々を過ごせ、勉強へ取り組む姿勢や、物事への考え方などに大きな影響があったと思います。

では、ここから私が個人的に良かったと思うこのプログラムのおすすめポイントを、自分の体験したことや成長につながったことと思うこと、シンガポールで得た知識を交えながら紹介していきたいと思っています。

まずは、自分の興味のある授業をいくらでも自由に受けられるということです。NTU(南洋理工大学)の面白い授業の制度として、授業が講義、チュートリアル(少人数クラス)、ラボの主に三つに分かれており、学びが自然と深まり、一人だけ授業内容に遅れていくということが無いようになっています。先ほど書いたように、このプログラムは自分で時間割を作

ることができますが、三週間という短い期間のため、履修登録をすることができず、講義のみしか受けられませんが、その分、講義はいくらでも受けられますし、各週で気になった講義を追加して受講することもできます。私は化学と生物の授業で時間割を組んでいましたが、1週目で、すべてを予習、復習することは難しいと感じたため、微生物学や食品科学など、興味のある授業に絞って空いた時間でスライドを見直すようにしました。こうすることで、授業が理解しやすく、今でもその分野について勉強をするモチベーションに繋がっています。

学生との交流から得たことも大きく、心配しなくても多くの友人ができることもプログラムのいいところだと思います。基本的に普通に授業を受けるだけなので、学生と共同して何かを行うことはなく、短期間で友達を作るのは難しいのではないかと感じていました。しかし、そんな私のために、授業がないときは、研究室にある机で勉強をしていいようにされていて、研究はできなくてもラボの人と雑談ができたり、ラボの中を見たいと言うとラボの見学や研究内容について説明してくれたりしました。さらにNTU側がチューターを一人つけてくれていて、その人や研究室の人が休日と一緒に観光をしてくれていたため、英語を話す環境を作ることができ、シンガポールについての話をたくさん聞く機会にもなりました。その中でも一番心に残っているのは、一緒に食堂で夕食を食べながら話した時間です。できるだけ現地の学生の方と話す時間を取りたかったため、夜まで学校に残っていると、夕食に誘ってくれて、ほとんど毎日一緒にご飯を食べることができました。そこで聞いた、シンガポールの政治について、日本よりも投票率が高いこと、ホーカーズという屋台のようところで食べる様々な地元の料理の話、培養肉がスーパーで売られていること、研究室に学部2年生でも自分の好きなタイミングで入れること、などこれらは一部ですが、さまざまな話をすることができました。特に彼らがいつも自分の研究について楽しそうに語っている様子は自分にとって刺激になり、こういった研究者になりたいと強く感じました。もちろん、自分から積極的に話しかけたり、自分のしたいことを積極的に伝えたりしないと、英語を話す機会はあまりないかもしれません。しかし、逆に言うと、自分から積極的に行動していけばいくほど、友達とも深くかかわることができ、留学前の自分と比べると行動力を身に着けることができたと思います。

他にもこのプログラムのいいところはここでは挙げきれないくらいたくさんあります。3週間という短い期間ですが、英語に関しては大きな変化はありませんが、毎日多く話すよう心掛けていると、3週目前半頃に詰まらないで英語が話せると感じ始めたり、専門用語も英語で覚えるたりする機会がたくさんありました。勉強とは関係ありませんがシンガポールで有名なローカルフードをできる分だけ挑戦してみるというサブ目標も友達の助けもあってかなり達成することができました。余談ですがラクサとハイナンチキンライスが美味しかったです。多文化の国だからこそ場所によってさまざまな街並みや食文化を楽しむことができたのも思い出の一つになりました。

最後になりましたが、シンガポールでした体験のすべては、ありきたりの表現ですが、かけがえのないものになったと思います。全体を通していえるのは、このプログラムは柔軟性

があり、自分で動けばその分充実度をいくらでもあげることができるということです。その方法は人それぞれだと思いますが、自分自身の楽しさを見つけることが必ずできると思います。ちなみに、研究室の教授や学生の方々はもっと学生が来てくれたらなと言ってくれていたのも、きっと大歓迎してくれると思います。少しでも興味を感じてくれた方はぜひ次の参加を考えてみてください。



Loh 研究室と写真撮影：左から 4 人目が Loh Zhi Heng 先生、右から 2 人目が自分、3 人目がチューターの Christine Ling。